

在外勤務報告: ニュージーランド、 クック諸島、ニウエ



(写真左は、ダルトン・タンゲランギ、ニウエ首相)

高橋 哲美 (たかはし てつみ)

前・在ニュージーランド日本国大使館一等書記官
国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部室蘭港湾事務所副所長

1991年北海道開発局(現国土交通省)入局。2021年3月から24年3月まで在ニュージーランド日本国大使館経済班に所属し、ニュージーランド経済とクック諸島、ニウエにおける経済協力を担当。過去、2010年4月から13年3月まで在バングラデシュ日本国大使館での勤務経験を持つ。



図1 NZの都市と緯度

1 ニュージーランドという国

(1) 人口と気候

ニュージーランド(以下、NZ)は、日本の4分の3程度の国土に日本の約25分の1に相当する約520万人の人が住んでいます。私の住んでいた首都ウェリントンには40万人ほどの人が住んでおりましたが、最大の都市であり経済の中心でもあるオークランドには約160万人が住んでいます。日系企業の駐在員も多くがオークランドに住んでおり、政治はウェリントン、経済はオークランドといった2つの中心地があります。

NZの気候は比較的穏やかで、北海道と比べても過ごしやすいという印象です。緯度でいうとウェリントンが青森と同じくらい、クライストチャーチが札幌くらいになります(図1)が、NZでは緯度の高い南島であっても山間部以外はめったに雪が降らないため、持参した防寒靴を履くことはありませんでした。ウェリントンの気温は、夏場でも20℃を少し超えたくらいで、3年間で25℃を超えた日はなかったと記憶しています。ただしNZは紫外線が非常に強く、街中を数時間歩いただけで、あっという間に日焼けをし、目が痛くなったことから、サングラスと日焼け止めは欠かせませんでした。

(2) ウェリントンの街並み

ウェリントンの市街地は、半日も歩くと端から端まで歩けるくらいの広さで、坂が多く斜面の上に家が建っている場所を多く見かけます(写真1)。市の中央くらいには、全体が植物園になっている小高い丘があり、市の名物でもあるケーブルカー(写真2)に5分程乗車すると、市街地を一望でき、博物館やプラネタリウムがある頂上に到着します。

公共交通機関は電車とバスを利用できますが、駅が市の中心まで遠いため、通勤する方の足としてはバスがよく利用されています(写真3)。またNZの人たちは、アウトドアに限らず外に出る(日光に当たる?)ことが好きなようで、天気の良い日は公園や教会の前庭などの芝生でランチを食べている方(写真4)や、カフェやバーなどでもテラスを利用している方をよく見かけました。



写真1 ウェリントンの住宅



写真2 ケーブルカー



写真3 市内を走るバス



写真4 週末の港湾緑地

2 NZでの生活

(1) 衣・食・住

衣食住に関しては、日本とほぼ変わらない生活を送っていました。私のアパートは、大使館から徒歩5分圏内で、スーパーも近くにある非常に便利な場所で見つけました。NZのスーパーでは、日本と同じように食料品を含めたほとんどの生活用品を手に入れることができますし、日曜日には公園などの駐車場で朝市が開かれ、新鮮で安価な野菜や果物を購入できました。近所には24時間営業のコンビニもありましたが、日本ほど品揃えが充実しておらず、スーパーに比べると割高なため、あまり利用しませんでした。またレストランやファーストフードなどの外食も充実していたので、食事には全く苦労しませんでした。衣類は日本からの持ち込み品で間に合ったため、購入することはほとんどなかったのですが、市内にはスーツなどの仕立屋やブランド品を扱うブティック、子ども服の専門店や古着屋などもあったので、衣類の入手にも困ることはなさそうでした。

(2) スポーツ、アクティビティ

NZのスポーツと聞くと日本人の多くは、オールブラックスで代表されるラグビーを思い浮かべるのではないのでしょうか。2023年のワールドカップ・フランス大会以降、NZから多くの選手が日本で活躍していたことをご存じの方も多いかと思います。オールブラックスの試合や各選手が所属するプロラグビーリーグを生で観戦し、試合後にスタンドまで来てくれた選手たちと一緒に写真撮影をしたことは、大きな思い出であり記念になりました。

2023年にはFIFA女子ワールドカップがオーストラリアとNZで共催されました。ウェリントンでは「なでしこジャパン」の試合が2試合行われ、スペインに4-0で快勝した予選リーグとノルウェーに3-1で勝利した決勝トーナメントの1回戦をスタンドから観戦することができました。

また、NZでは登山やトレッキングといったアウトドアが盛んで、家族で豊かな自然を楽しむためにキャンピングカーのレンタカーが多く利用されています。ちなみに豊かな自然という点ですが、国内をドライブしていると“青い空、森や牧場の緑、そして羊や牛…”といった、北海道出身者にはどこか見慣れた風景が続



写真5 ビアバーにて外交団の方々と（執筆者は左側の白いシャツ）

くことに気づきます。

それからスキーやスノーボードといったウィンタースポーツを好む方も多く、子どもの頃から南島の雪山（クイーンズタウン近郊）に足を運んでいます。また毎年雪を求めて夏のNZから冬の北半球へ旅行する方が多く、北海道にもたくさんの方が訪れています。コロナ禍後の新聞記事で日本への観光特集を見かけたのですが、NZの方に“日本で知っている都市は？”との問いの回答で1位 東京、2位 大阪、3位 京都の次に4位でニセコと掲載されていたのを見たときは、そんなに多くのNZ人が冬の北海道に来ているのかといった驚きがありました。政府関係者や外交団にも北海道を訪れたことのある方がいて、出身地を話すと雪まつりやホワイトイルミネーションが話題になり、冬の北海道が国際的に高い認知度であることを改めて感じました。

(3) クラフトビール

NZはワインの製造が有名で国内に多くのワイナリーがあり、スーパーでもおいしいワインを安く購入できます。しかし今回はあえてクラフトビールを話題にさせていただきます。

ウェリントンには数十件のビアバーがあります。メーカーからラガー、エール、ペールエール、スタウト等、数種類のクラフトビールを卸してもらい、タップで販売するのが一般的ですが、中には店内にブルワリーを備えている店もあり、大きな醸造用タンクの横でビールを飲むことができるビアバーもあります。

また多くのビアバーは、ランチも食べられるように午前11時頃から店を開けており、特に週末だと日中からテラスで飲んでいる方の姿を見かけます。外交団の集まり（飲み会？）もビアバーで行われるのが通例で、ビール好きが集まる会ともなっていました（写真5）。

3 新型コロナウイルスの影響

(1) NZの国境封鎖と隔離政策

NZでは、2020年から国境封鎖が行われており、大使館員の着任や海外在住のNZ人が帰国するような特別な場合を除いて、入国することができませんでした。私の着任も特例的な入国として扱われ、オークランド空港に到着後、ホテルにおける2週間の管理隔離検疫（MIQ）を経て、ようやく入国となりました。おかげでNZ国内における新型コロナウイルスの感染者はゼロであり、公共交通機関を利用するとき以外はマスクなしで普通にレストランやビアバーで飲食ができました。

ただし新型コロナウイルス感染者が1人でも発生した場合には、ロックダウン（都市封鎖）が行われ、罰則を伴う強制力のある措置がとられました。着任直後は、世界的にデルタ株による感染者が増え始めた頃で、8月にはNZ国内に感染者が1人確認されたため、NZ全土のロックダウンとなりました。大使館におけるロックダウン中の勤務は、隔日出勤で出勤日以外はテレワーク、また出勤時には警察に呼び止められても良

いようにNZ政府発行の文書を持参することが義務づけられました。この期間に自宅の窓から見たウェリントンには、“誰一人歩いていない、車が1台も走っていない”まさにゴースタウンのようでした。

なおNZでは、感染者の訪問先を追跡できるようにレストラン等の訪問場所にはQRコードが掲示されました。このシステムは、国民がQRコードを読み込むことで、保健省が新型コロナウイルス発症者の足取りを確認できると共に、同じ時間に同じ場所を訪問していた方に対して、自主隔離を指示できるようにするためといったものでした。

(2) 国境封鎖の弊害、そして国境の開放

国境封鎖により、海外との人の動きがなくなったことは、NZ経済に大きな影響を与えました。また世界的なサプライチェーンの混乱は、輸入品が国内に入らなくなったことに加え、キウイフルーツのような果物、食肉、木材といった輸出品にも影響を与えました。その上、人口の少ないNZでは、労働力を太平洋の島国からの移民で補っているのですが、彼らの多くが帰国したため農林水産業、観光業、建設業などで労働者不足となり、国内経済の停滞に追い打ちをかけました。そしてこのように経済への影響が浮き彫りになるにつれ、国民からの国境開放への声が高まってきました。

NZ政府は、国境開放への第一歩として2022年4月12日に条件付きで海外との往来を可能としました。当時のアーダーン首相は、4月20日から23日の日程で国境開放後の最初の外遊をしており、そのときの訪問先として日本を選んでおります。そして7月31日には、ワクチン接種証明書と医療機関で24時間以内に受診した陰性証明書の提出を条件として、全ての国からの渡航者を受け入れることとなり、全面的に国境が開放されました。

4 クック諸島とニウエ

(1) 兼轄国であるクック諸島とニウエ

太平洋上の島国であるクック諸島とニウエは、在



図2 クック諸島とニウエの位置
(ガイドブック：国際機関太平洋諸島センターより引用)

NZ日本国大使館が兼轄国として管轄しております(図2)。この2カ国はNZと自由連合の関係にあり、NZのパスポートを持ち、経済支援や安全保障(特に軍事権)をNZに属しております。いずれの国も主たる産業は美しい海を中心とした観光で、航空機による観光客の到来が国の財政を支えておりますが、食料品を含む生活物資のほとんどは、NZやオーストラリアなど外国からの輸入に頼らなければならず、自給できる食料品はタロイモなどわずかな種類の農産物と近海で獲れるマグロのような海産物しかありません。このため、両国とも海上輸送が国を支えるライフラインになっています。

私はNZに経済担当として着任したのですが、2022年からの2年間はクック諸島とニウエへの経済協力も担当することになり、ニウエに2度、クック諸島に4度も訪問する機会を得ました。おかげで日常業務は非常に忙しくなったのですが、在任中にクック諸島やニウエにこれだけの回数を訪問したのは、外務省の職員でもないのではないかと考えています。

(2) クック諸島という国

クック諸島は、NZから北東に約3,000km離れた位置にある15の離島からなる国で、約200万km²に及ぶ広大な海域を領海としております(図3)。南方の5つの火山島以外は珊瑚礁が隆起した環礁島となっています。人口は約2万人で、首都アバルアのあるラロトンガ島に約1万2千人が住んでおり、残りの人口は14の島のうち南側に集中しております。しかしクック人の多くはNZやオーストラリアに移民として住んでおり、

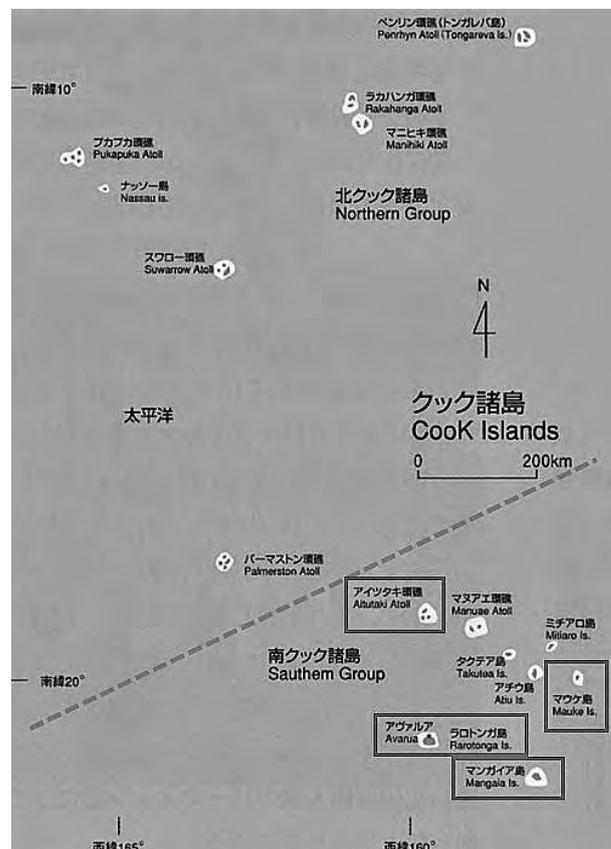


図3 クック諸島
(クック諸島ガイドブック：国際機関太平洋諸島センターより引用)

NZに5万人以上、オーストラリアに5万5千人以上が生活しているとのこと。なお在留邦人はラロトンガ島に住んでいる2人だけとなっています。

NZからクック諸島へは、NZ航空がラロトンガ島に向けて毎日2便を運航しており、比較的容易に渡航できます。国内の離島へもラロトンガ航空が運航している航空便によります。2度訪問したアイツタキ島は、2番目に人口の多い島で、ラロトンガ島から毎日1～2便が運航されていますが、他に訪問したマンガイア島は週3便、マウケ島は週2便のみの運航のため、出張行程を組む際には極力無駄が生じないように面会者と視察先の選定に苦慮しました。

クック諸島の各島は、景観が美しく(写真6、7)、海の透明度が非常に高く、空気も澄んでいることから、天気の良い日は鮮やかな自然の色を見ることができます。アクティビティもダイビングやシュノーケリング、フィッシングのようなマリンスポーツが中心で、クック諸島を4度も訪問しながらアイツタキ島で1度しか泳ぐことができなかったことが、若干心残りとなっています。また離島の訪問では、滅多に外国人が訪問しないこともあり、どの島でも盛大なおもてなしを受け、島民の温かさや素朴さに触れたのですが、生活の質素さとモノの少なさから、首都のあるラロトンガ島とは経済上の格差が大きいことを感じました。

(3) ニウエという国

ニウエは珊瑚礁が隆起してできた世界最大の島で、NZから北東約2,400kmの島に国民約1,700人が住む世界で二番目に小さな国です(図4)。島の大きさは1周約67kmで、その面積は259km²と利尻島と礼文島を合わせたくらいになります。島には川がなく、雨水は島の内部に浸透して石灰岩で濾過されてから海に染み出ることから、周囲の海は非常に透明度が高く、70mとも言われています。そして珊瑚礁が隆起した部分から沖合は急激に水深が深くなるため、海の色は鮮やかなエメラルドグリーンとネイビーブルーの2色にはっきりと分かれています(写真8)。

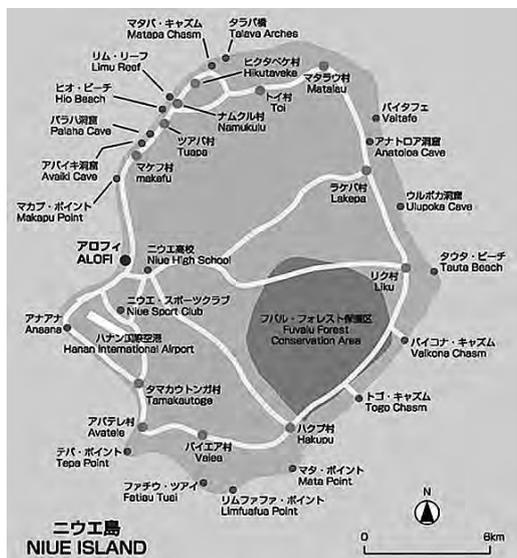


図4 ニウエ

(ニウエガイドブック：国際機構太平洋諸島センターより引用)

ニウエ人の多くは、クック諸島と同じく移民としてNZやオーストラリアに移住しております。その人数はNZに2万2千人以上、オーストラリアに3千人以上と、本国の15倍以上とされています。なお在留邦人数は登録上では1名だけで、その方は普段は世界中を飛び回っており、1年間で数ヶ月しかニウエに滞在していないとのことでした。

ニウエへはオークランド発のNZ航空が唯一の渡航手段となっており、観光シーズンの冬場は週2便、それ以外の時期は週1便の運航となっています。またNZからの物資輸送は、月に1度の貨物船しかありませんが、ふ頭が1つだけの港(写真9)へは沖に停泊した貨物船からバージ船にて10フィートコンテナを2個ずつ70往復以上運航して運ぶとのことでした。運輸大臣からは、貨物船が直接接岸できる港の建設が国としての悲願であり、2023年に港湾の建設に向けたフィージビリティスタディ(新規事業調査)をアジア開発銀行(ADB)に依頼したと聞きました。

(4) 経済協力を通して感じたこと

クック諸島とニウエは共に海外とのつながりに依存しているため、本稿では観光、移民、そして安全かつ安定した物流の確保をクローズアップしましたが、これ以外にも医療、教育、インフラ整備など、多くの問題を抱えております。

現在、国際援助委員会(DAC)では、両国とも国民一人当たりの所得が一定以上のため、クック諸島はDAC卒業国、ニウエは中高所得国として位置づけられており、DAC加盟国は、どこの国も積極的な支援を行わない取り決めとなっています。そのような中でも日本は、3年毎に開催される太平洋・島サミット(PALM)に合わせた無償資金協力による資機材の支援や毎年国民に直接供与する草の根・人間の安全保障無償資金協力による支援を行っており、両国から感謝されています。私自身も障害者施設の増設や小学校の修繕といった案件形成を通じて、両国の多くの国民とふれあうことができたのは、貴重な経験となりました。



写真6 ラロトンガ島の夕日



写真7 アイツタキ島のラグーン



写真8 ニウエのビーチ



写真9 ニウエのアロフィ港